

蕎麦切 広重 街道館 (前編)

～ 西に東に 旅の空 ～

ほし ひかる

(江戸ソバリエ協会 江戸ソバリエ認定委員長)

I.江戸っ子「広重」

1797年、歌川広重は八代洲河岸の定火消同心安藤家の長男として生まれた。幼名を徳太郎といった。八代洲(ヤヨス)河岸の名前はオランダ人のヤン・ヨーステンの拝領地からきているが、現在は千代田区丸の内2丁目となり、安藤家のあった所は皇居の馬場先濠前の明治生命館になる。

火消は、武士によって組織された武家火消と、町人によって組織された町火消があった。武家火消は主として江戸城火消が任務であるが、幕府直轄で旗本が担当した定火消と、大名に課役として命じられた大名火消とに分けられてい

た。このころの定火消は江戸城周辺に8ヶ所設けてあり、定火消役の下に与力6騎、同心30人という組織になっていた。

同心は刀こそ差しているが生活は町人なみ、貧困とまではいかないが、さりとて家計はあまり楽ではなかった。

重右衛門の家系は、父が津軽藩士田中某氏の子で安藤家に婿養子に入ったということぐらいしか分かっていない。

1809年(広重13歳)、親が亡くなったため徳太郎は定火消同心を継ぎ、安藤重右衛門と名を改めた。定火消同心というのはそんなに多忙ではなかった。それでも重右衛門は真面目に勤め、かつ侠気があって好人物であった。また文学にはあまり興味を示さなかったが狂歌を好み。烟草と酒は好きだった。

地本問屋によると、他の浮世絵師と異なって広重は、品行も良く、文人墨客の付き合いは常に同等であった。また他の浮世絵師は宴席などで絵を頼まれても描くことを嫌ったが、広重は快く受けてくれた。それに他の絵師と異なって広重は期日までに仕事を仕上げてくれた。それであるのに画料にうるさくなかった。豊国および国芳などは描くより先に画料を要求し、それでも仕事をしないことがあった、…など。

これらの評判を見ると、広重は素直で実直で気前のいい江戸っ子の長所を持ち合わせていたようだ。

絵については、幼いころから描くことが大好きでまた上手だった。ただ両親が早くに他界しているから、その才がどの血筋からきているのかなどは不明である。ただ若いころから、重右衛門には八丁堀の定火消与力岡島林斎(?~1865)という兄貴分的な友人がいた。彼は狩野素川(1765~1826)の画風を学んでいたためその影響をうけていたかもしれない。他に大岡雲峯(1765~1848)という旗本の文人画家に南宋画を学んだりしていた。言い伝えでは父が習わせたともいわれているが、真偽は定かでない。そんな重右衛門だったが、1811年(15歳)、芝片門前町(芝大門2丁目・芝公園2丁目)の歌川豊広(1774~1830)に入門した。豊広は当時人気だった豊国(1769~1825)とともに歌川豊春(1735~1814)の兄弟弟子だったが、派手な豊国に比べ、豊広は地味な絵だった。かくして、友人の岡島と、師匠の大岡雲峯と歌川豊広が、広重絵画の基本となったことはまちがいない。

まもなくして(1812年;広重16歳)、重右衛門は師匠の「広」と自分の「重」から広重と号するようにな



〔江戸城二重橋：ほしひかる 絵〕

った。

1820年(24歳)、広重は戯作者東里山人(1791～1858)の『音曲情の糸道(上下)』を描いた。これが広重の仕事の初筆といわれている。以後、柳亭種彦(1783～1842)や瓢亭吉見種繁の戯作本の絵を描いていたが、このころの広重は大鋸町(中央区京橋 1-9)に住していた。

1824年(28歳)になると、広重は安藤家の祖父の子に同心職を譲った。つまり律儀な広重は養子だった父に代わって、同心職を安藤家にお返し、自らは絵に専念することにしたのである。

1829年(33歳)、師の歌川豊広が没した。広重は豊広の名を継ぐことを望まれたが、「画道未熟なり」とこれを辞した。その結果として独自の道を歩むことになったが、特別な意欲があったわけではあるまい。おそらく江戸っ子らしくサッパリと断っただけであろう。

1832年ごろから、広重は川口屋正蔵、喜鶴堂などで『東都名所』を刊行するようになり、段々と「名所絵」の方に進んでいた。またこのころから絵画界では新輸入された絵具「ベロ藍」が使用されるようになっていたが、広重もこれを使い始めていた。

II.茶屋の蕎麦 ～『東海道 程ヶ谷宿』と『木曾海道 関か原宿』より

そんなとき、広重の人生上、大きな出来事が起きた。

1832年(広重 36歳)、京へ上って、八朔御馬進献の式を拝観し、その絵を描くようにと幕府から内命があったのである。御馬進献とは、年々幕府から朝廷に馬を進献する儀式であり、八月朔日に在京の大番頭が内裏へ御使に立つことになっていた。

広重はいつも決断が速かった。京の往来を機に名所を探ろうとの考えもあった。広重はすぐ金の工面に走って、旅に出た。そして山水の勝に感銘し、それから景色絵に専念するようになった。ひいてはこの体験からあの名画『東海道五十三次』が誕生することになった、と三世広重が語っている。現に1833年(広重 37歳)、『東海道五十三次』(保栄堂)が大いに売れて人気を博し、1835年(39歳)に『東海道五十三次』は完結した。

絵画というのは原始時代は別して、だいたい西洋絵画などは人物像から風景画へと進展していった。浮世絵もそうである。役者・遊女などの人物絵から景色絵に広がっていった。わけても日本は世界にない“街道美術”という独自の分野を生んだのであるが、それを完成させたのが、江戸後期に彗星のごとくに現れた広重の『東海道五十三次』だと言える。続いて広重は1837年(41歳)のころには『江戸近郊八景』『金沢八景』『木曾街道六十九次』など次々と発表していった。

しかし、名作『東海道五十三次』の出版の経緯がはっきりしていないため、現代になって「広重、東海道を旅せず」の説が出てきたりしている。理由は広重が上洛した幕府の記録もないし、また『五十三次』の半数ちかくは『東海道名所図会』などからの借用と思われるというのである。しかし内命ならば記録がないこともあるだろう。また現代のように著作権の概念のない江戸時代は借用・参考・模倣は普通のことであった。そして何よりも広重が幕府に随行したのは夏から秋にかけての短期間である。しかるに広重の絵の特色は四季に対応して構成しているところにある。当然、他の季節絵は想像力を働かせて描かなければならない。

そういうわけで、一般的に物証主義というのは理屈的には有効であるが、証拠にとらわれ過ぎると本質から外れることもある。大事な点は、それまで戯作本の挿絵でいどの絵師だった広重がなぜ旅情豊かな『東海道五十三次』を描くように転進できたかである。その点は、よく指摘されるように新興の出版社保栄堂が少し前に『東都名所』などの景色絵を描いた広重に目を付けてくれたことも大きいだろう。それもさることながら、旅の画家への大きなきっかけとして、初の遠出である上洛は人生航路上まことに記念すべき出来事だったといえるだろう。まあとにかく、これ以上の上洛の真相は、実際に東海道を徒歩で旅してみるしかないのかもしれない。

さて、私たち江戸ソバリエが関心を示すのは『東海道五十三次』のうちの「程ヶ谷宿」である。

日本橋 ⇒ 品川宿 ⇒ 川崎宿 ⇒ 神奈川宿 ⇒ 保土ヶ谷宿 ⇒ と、広重はやって来た。そこは特別な名所すらない所である。ありふれた小さな橋、ありふれた茶屋が数軒、その遠方に田園風景が見えるだけ。なのに、いかにも街道の趣を醸しているのは「街道美術」を完成させた広重の筆の力だろう。

橋は帷子橋というらしいが、それを渡ると、われわれソバリエは一軒目に「二八」と書いてある茶屋に目がいく。いわゆる街道の茶屋には「蕎麦」が相応しいとして広重は描いたのであろう。

そこで供される蕎麦がどんなものであったかは分からないが、ちょっと入ってみたいくなる…と想着いたら、広重は別の『木曾街道六拾九次』の「関か原」では旅人がちゃんと蕎麦切を食べているところを描いている。

『木曾街道六拾九次』というのは溪斎英泉(1790-1848)と広重の合作であるが、先ず英泉が1835年から描き始めて24景を遺した。広重は1837年(41歳)から始め、47景を描き完成させた。これを版元別に見ると、表のとおりである。



【「程ヶ谷宿」の帷子橋】
(ほしひかる 蔵)



【現在の帷子橋跡(天王町駅前)】
(ほしひかる 写真)



【「関か原宿」】
(望月義也コレクション『木曾街道六拾九次』)

| 版元 | 保栄堂 | 保栄堂錦樹堂 の合板 | 錦樹堂 | 計 |
|----|------|---------------|--------|----|
| 店主 | 竹内孫八 | | 伊勢屋利兵衛 | |
| 英泉 | 17 | 5 | 2 | 24 |
| 広重 | 1 | 2 | 44 | 47 |
| | 18 | 7 | 46 | 71 |

つまり、版元は保栄堂から錦樹堂へ、絵師は英泉から広重へと移ったのである。そんなことから『木曾海道六拾九次』は景色絵を完成させた広重の代表作の一つと評価されるところである。

なお、英泉は「木曾街道」とし、広重は「木曾海道」としている。

Ⅲ. 甲府の手打ち蕎麦～『甲州日記』より

『東海道五十三次』では、広重上洛の史料が行方不明となっているため、先述のような物議を招いているが、広重が書いた甲斐、安房、上総への往還日記は何とか残っている。そのうちの『甲州日記』はよく引き合いに出される史料として有名であるため、ここでもちょっと開いてみよう。といってもこれも原本は関東大震災で焼けてしまったが、たまたま印刷物になっているためわれわれも見る事ができる。

広重の甲府行の目的は、甲府城下町で行われる小正月の道祖神祭礼で使用される大型幕絵を描くためであった。当時、各地の都市では町人文化が盛んなころであり、甲府も甲府商人の経済力によって、江戸の著名な絵師を招いて幕絵製作を行っていたのであるが、甲府緑町一丁目(現:若松町)の町人に依頼

された広重は、二つ返事で甲府へ出かけて行き、他にも幟・襖・屏風などの絵も請け負った。

緑町一丁目の大通り(現:遊亀通り)に飾られていた幕絵は、現在山梨県博物館に2点収蔵されている。高さ約1.8m×横11~16mの麻布に江戸名所の「目黒不動境内」が描かれた物。本来は東都名所の幕絵が10点以上製作されていたらしい。

そんなことで、広重は1841年4月(広重45歳)一人甲斐に赴き、山間の奇勝を巡って、11月江戸へ帰って来た。

『甲州日記』の概略は次のとおりだが、人間広重を理解するために、また江戸後期に旅がいかに流行っていたか、道中の食事がどんなだったなどがよく分かるので、ぜひ目を通してもらいたい。

なお、われわれが関心を示す食べ物関係は**強調文字**で、蕎麦食は**赤字**で記した。

「卯月二日。朝うす曇。朝五ツ時(朝8時)出立する。丸の内より、四谷新宿追分へ。この辺りの道は悪い。四ッ谷新町、右に十二社道あり。荻久保、堀之内道、これより十八町という。両側に茶屋あり。

布田宿(調布市)、この道は退屈。堀之内の住民だという男女3人と道連れになる。

府中宿、六社宮(大國魂神社六社明神)を拝す。多摩川舟渡し、日野宿を過ぎた辺りで信州諏訪の侍と連れになる。

(この旅で、同じ旅人と道連れになったことが度々書いてある。いわゆる「旅は道連れ」は昔の旅の楽しみのひとつであったが、新幹線が登場する前の時代まではそういう**旅文化**があった。)

広重の旅『日記』は続く…。

八王子宿(八王子市)、八日町の徳利亀屋にて断られたので、隣の山上重郎左衛門方泊。この家の者は甲州武田の残党だという。

三日晴天。八王子千人町より、散田村辺り、両側建仁寺垣の農家が見事。この辺より先、すべて機織の家多し。村中に流れあり、小さい水車を仕掛け、尺四、五寸の臼で米を搗いている。

ここより小名路宿(八王子市)、右側に「山口」という茶屋あり、江戸料理番を使っているから何でもできるという。この宿から高尾山への別れ道あり。ここから身延参りの3人と道連れになる。小仏峠で休む。中喰に一膳飯。平、刻み昆布、油揚げに落。はなはだ不味い。

ここに武蔵国と相模国の境木があった。与瀬宿(相模原市)入口の茶屋で鮎寿司を食う、高かったのに不味かった。

関野宿(相模原市)の入口、梅沢駅にて休む。小松屋に夫婦石あり。その先の茶屋にて大饅頭、塩餡を喰う。

関野の宿を越えて境川にいたる。津久井郡内の境なり。川を見晴らし絶景なり。ここに茶屋が3軒あり。中の茶屋にて食事する。鮎の煮付、桜飯、饅頭一膳と、酒一杯飲む。これより諏訪の番所(上野原市)、諏訪村諏訪の社、この辺から先は家毎に機織るなり。

(桜飯というのは一見華やかだが、醤油だけの炊き込みご飯のこと。)

広重の『日記』は続く。

上野原より野田尻まで一里半、山道長し。見晴らし景色よし。度々休む。野田尻駅にて小松屋に泊まる。広いばかりにきたなき事おびただし。屁のような茶をくんで出す旅籠屋は、さてもきたなき野田尻宿(上野原市)、その夜の膳献立は、皿(塩鯨半切)、汁(菜)、平(凍り豆腐・芋菜)、飯。座敷に妻子を連れた桑名藩中の武士と相宿となった。

武士は妻子を寝かしてから楽しみに四天流の居合を抜くと言うから見物した。砲術の話もする、日本にニヶ所しかないという火術の秘書を所持していると言う。天文学も忍びの術の話もしてくれた。

(「平」とは平椀にもった料理のこと。また「屁のような茶」とは、飲みたくもないまずそうな茶だ。街道の茶屋や旅館の飲食はそんなものだったのだろうが、狂歌好きの広重らしい上手い表現である。しかし旅は道連れ、珍しい話

に他人さまの人生を想像できるところも旅の楽しさである。)

広重の『日記』は続く。

四日晴天。野田尻を発って犬目峠へ。この坂道から富士を見る。

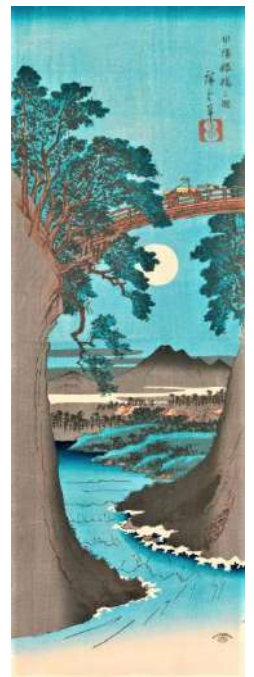
(『日記』はこれだけだが、広重は『富士三十六景』と『不二三十六景』の「甲斐犬目峠」に迫力のある峠から見える白い富士山を描いている。)

『日記』は続く。

犬目峠宿(上野原市)のしがらき茶屋にて休む。この茶屋、店を開いたばかりというから新しかった。夫婦とも江戸新橋の者、元仕立屋職人だったとのこと。団子、煮しめ、桂川白酒、富士の甘酒、清酒、味噌などを売っていた。

犬目より上鳥沢まで帰り馬、一里十二町乗り、鳥沢にて下り、猿橋まで行く道二十六町の間、甲斐の山々遠近に連なり、山高くして谷深く、桂川の流れ清麗なり。十歩二十歩行く間に変わる絶景、言語に絶えたり。拙筆に写しがたし。

(猿橋の絶景に感動した広重は江戸に帰ってから記憶をもとにして名画「甲陽猿橋の図」を描いた。見事な絵である。この猿橋が日本三大奇橋として有名になったのは広重の力が寄与しているのだろう。)



〔甲陽猿橋の図〕
(内藤正人
『歌川広重』
東京美術)



〔甲斐大月の原〕
(絵葉書)

『日記』は続く。

猿橋宿より駒橋宿までは十六町、谷川を右に高山遠近に連なり、近村の人家まばらに見えて、風景たといなし。猿橋向茶屋にて山女焼びたし、菜びたしを食べる。

大月宿(大月市)、富士登山の追分あり。右へ行って坂を下ると大きな橋があり、谷川の流れ凄まじく奇石多い。岩石は聳え、樹木が茂り、四方の山は屏風を立てるがごとく。山水は面白くまた物凄い。

広重はここでも「甲斐大月の原」という題で『富士三十六景』と『不二三十六景』に白い富士を描いている。

(個人的には、秋の七種を描いた『富士三十六景・甲斐大月の原』が大好きだ。後代の太宰治が小説『富岳百景』を書いたのも広重の影響だろう。そのまた影響をうけた小生も「富士に月見草」の絵を描いてみたことがある。)

広重『日記』はさらに続く。

この大橋は朽損じて、脇に仮の橋あったので、これを渡ると道が左右に分れている。合点がいかないが、尋ねるべき人家もなく、往来も絶

え、途方に暮れてしばらく佇んでいると、しばらくして山中から材木を背負った人が来たので、訊いて、下花咲・上花咲宿(大月市)に至る。そこにかしくという茶屋があった。初狩の手前で休んだ。ここで江戸品川の4人連に会った。上初狩宿のはずれに茶屋があり、ここの女房、甲府八日町の生れにて、江戸へも行ったことがあると言う。団子4本喰う。珍しい茶釜にて茶を煮る。

天神坂をこえて白野宿(笹子町)に入る。葦ヶ窪という所あり。ここに毒蛇済度の旧地と記した碑があった。一丁ほど上って百姓勝左衛門という者の家に立寄り休み、毒蛇の由来を尋ねれば、奥より老婆出てきて

物語る。昔、ここに小俣左衛門という大百姓がいた。娘およしは美女なれど、心悪くけんどん邪けん、ついに蛇身となった。そのころここに大沼あり。夜な夜な出でて、里人を悩ます。親鸞上人が来り給いて、これを教化してくれた。小俣の家は今もあるという。この婆は、70と7、8歳ぐらい、去



〔富士に月見草〕
(ほしひかる 絵)

年は信州善光寺や江戸見物、江の島、鎌倉大山へ参って来たなどといろいろ話してくれた。粉麦の焼餅も馳走になった。

(広重は、こういう地元の話が好きで、よく書き留めている。昔話や民話も名所のひとつだからである。)

『日記』は続く。

広重は、ここを出て若松屋に泊った。この家もきたなし。前の小松屋の倍ほどむさい所。壁は崩れ床も落ち、地虫が座敷を這い、畳あれども埃が埋み、蜘蛛の巣が張り、行燈、かけ火鉢一つ、湯呑形の茶碗のみ。

次は、黒野田泊。料理献立は、皿(目刺し四ツ、鯛)、汁、平(蕨、牛蒡、豆腐、芋)、飯。皿(蒟ささがき生ゆかけ、汁、平(豆腐、赤はら干物)、飯。

この日江戸品川の3、4人と、たまたま出会い、少々話する。

五日晴天。黒野田を発って笹子峠にかかる。半分ほど上って休む。江戸男女姉弟連れ、遠州掛川の人男女三人連れ、甲州市川禅坊主と俗壺人に会い、もの言う。ここからまた上ると矢立の杉が左にあり、樹木は生茂り、谷川の音、諸鳥の音が面白く、うかうかと峠を越えて休み、また杜鵑の声に足を止める。

鶴瀬宿(甲州市)を過ぎ、細い山道を十三町行って、鶴瀬の番所を通る。女は切手あり。ここで飯喰う。山うどの煮付平なり。

この辺りから江戸講中の人たちと連れだち、右は山なので山の腰に行く。

(たまたま江戸ソバリエ協会では、江戸東京野菜コンシェルジュ協会と協同で江戸野菜を使った江戸蕎麦を江戸の蕎麦屋さんに提案している。そのなかに「立川産の東京うど」を使った冷やし蕎麦を料理研究家の林幸子先生に創作してもらって展開した。そんな目で《山うど》の煮つけを見ると、これも食べてみたくなる。)

(また「講中の人たち」とは、今でいう団体旅行みたいなものだろう。昔の団体旅行というのも日本の旅文化の一種だったのかもしれない。)



[更科堀井立川うど
更科冷やし蕎麦]

広重『日記』は続く。

左に谷川高山に巖石聳え、樹木茂り、向うに白根ヶ岳、地蔵ヶ岳、ハツヶ岳、高峰見えて古今絶景なり。

ここに柏尾山大善寺(葡萄寺)あり。この辺から勝沼辺りまで名物葡萄を作り、棚がたくさんある。ここで江戸連中とともに常盤屋という茶屋で、玉子とじにて飯、飯安し。江戸者は横道に入る。この茶屋出ると、また江戸の姉弟と市川の人に会う。この道連れはなはだ面白かった。

ここから栗原を過ぎて田中といえる所、ここに節婦之碑と記す碑があった。

享保十三巳年の洪水で一村難儀におよぶ。この時安兵衛と阿栗という夫婦あり。安兵衛はライ病を煩い、その母も病に臥し、家貧しくして難儀するに、妻のわずかな商い、あるいは夫と姑を介抱するので、安兵衛が言うには「とても全快は難しいから、入水して死にたい。お前は子もなく年も若ければ、他に縁付き、身を全うすべし」と。しかし妻聞いれず「この家に嫁せしより、ここを出んとは思わない、覚悟しているから私もともに死にます」と言って、帯に二人の身体を巻き、洪水に飛入って死んだ。この事が上聞に達し、公より節婦の碑を御立下されたという。

(話題の少ない村は、日常よりちょっと上の美談や、ちょっと下の醜聞は伝説となり、それが名所となったりする。)

『日記』は続く。

これより石和宿に至る。入口の茶屋で江戸講中の人たちが休んでいた。ここで焼酎一杯と饅頭一膳喰う。江戸姉弟の道連れは、浅草にて梅川平蔵、お仲をよく知る人なり。勝沼よりこの辺りは平地で歩きやすかった。

そこから縄手を越えて、甲府の町に着いた。ここに酒折宮(甲府市)という旧跡あったので、御神体を絵にした。柳町で連れと別れた。

七ツ時分、甲府の緑町一丁目の伊勢屋栄八宅に到着した。

この日は入湯して久しぶりに髪月代を剃った。この日から伊勢屋に逗留。

六日晴天。朝、かひや町芝居(亀屋座)へ行く。狂言「伊達の大木戸」二幕見物。幕御世話人衆中に対面した。**酒盛あり。**

七日晴天。朝、役者の佐野川市蔵に逢う。朝より芝居見物。そこで見知らぬ女性客から茶菓子を貰ったので、返礼した。「お俊伝兵衛」二幕、「いろは四十七人」新幕。

(広重は芝居見物が好きだった。)

『日記』は続く。

八日晴天。朝荷物到着。霞幕の色がようやく決まった。世話人衆中、竹正殿・万定殿・岩彦殿・福勇殿・辻仁殿・岩久殿・村権殿・松弥殿・川善殿・鳴太殿。夜、吉岡舎亀雄が来た。

九日晴天。細工所が決まった。昼過ぎより芝居見物。狂言「いろは四十七人」中幕。「契情阿波の鳴門」一幕。その後、町をぶらついて一蓮寺へ。境内に稻荷天神やその他に末社あり、土弓場、料理茶屋などもあり。**忍光寺前の料理屋にて夜食。常さん御馳走になる。**

十日朝曇晴。二間に一間、鍾馗を描く。**幕世話人衆奥にて酒盛、少々馳走になる。夕方、亀雄大人同道、一蓮寺貸座敷にて酒盛、三桂法師同道、石橋庵にて騒ぐ。**

十一日曇。五尺屏風をしたため、鍾馗画料金二百疋。鰻一重貰う。夜、佐野川市蔵と酒盛。

十二日雨天、襖4枚認め、**胡瓜一籠、なまり(鯉)1本、辻仁より到来。夜、蕎麦ご馳走になる。**

十三日晴天。柳町たびや、槌のや、十文宅にて、狂歌開きへ出席。

十四日晴天。襖二枚。幕の手附金五両請取。四両一分二朱江戸へ送る。

十五日晴天。朝、肴町三丁目村田幸兵衛殿宅へ行く、昼過ぎより御幸祭礼見物に行く。甲府町々、近郷近在の老若男女群集。少々具合悪くなったので薬を呑んだ。夜、芝居見物、棧敷なし、狂言「一の谷」二幕。

十六日晴天、夕立あり。病気全快。**村田幸兵衛より手打蕎麦を貰う、極上々なり。**夜祭礼の話聞く。

十七日晴天。辻屋殿襖できる。**茶菓子がくる。**二間に一間の幟の孔明を描き始める。

十八日晴天。孔明幟ができた。昼過ぎから幕描き始め、夜なべする。

十九日晴天。村田幸兵衛宅の襖四枚したため、**村田幸兵衛より寿司が来る。夕方、辻屋にて酒と蕎麦ご馳走になる。**夜、芝居見物「岩井風呂」三幕。

廿日晴曇。幕の墨描きをした。唐木綿鐘馗をしたため、夜、肴町の村田幸兵衛宅へ行く。帰り芝居へ寄る。**打出し後、三階にて酒盛。味噌漬香の物辻屋より貰う。**

廿一日晴曇。辻屋にて浴衣を誂えた。

廿三日。辻屋、小鐘馗したためた。

甲府滞在中には、御岳身延などへ登った。

*ここで『日記』は途絶え、十一月十三日からまた再開している。

*しかし『日記』とは別に、甲府各地の見所や裏富士を描いた絵が残っており、また狂歌も添えてあるらしい。

霜月十三日晴天。幕墨描きをする。夜、**辻屋に招かれる、肴はよし、酒・蕎麦不味かった、早々に帰る。**

十四日晴天。彩色。夜、鳴海屋へ招かる。八日町永楽屋の後家さんが来る。

十五日晴天。幕ができた。夜、万屋にて酒。四ッ過ぎ幕を張る。またまた酒を呑む。

十六日晴天半曇。朝、幕の仕事少々。鳴海屋の隠居所にて酒盛。万定源兵衛と鰻屋へ行く。夜、芝居二幕観る。この日は大酔した。

十七日晴天。芝居看板を描き始める。鳴海屋の屏風ができた。夜なべ少々。夜中幕を張る。明け方まで酒を飲み、別屋に泊る。

十八日晴天。看板彩色仕立。夜、別屋にて立振舞する。

十九日晴天。朝筆納、幕書付を書く。昼過ぎ皆々連中と別れ酒を飲む。夜、荷物出す。鳴海屋、万屋にて夜更けまで酒。

廿日曇少々雪降る。朝六ッ半時頃、緑町伊勢屋出立。松黒と同道して甲府外れで別れ、一人道を急ぎ、六ッ時頃上花咲宿の間屋に泊る。この宿は上々、信州の人と相宿となる。

廿一日晴天。朝六ッ半頃出立。大目のしがらきにて一休みする、酒汁が不味かった。上野原の大ちと屋で一休み。昼飯を喰う。セツ半頃、与瀬宿の稲荷屋に泊る。上辻屋兵助や役者の川蔵と相宿。上野原の小沢源蔵という郷土大家の話聞く。

廿二日晴天。朝、与瀬宿出立。川蔵同道、酒呑いずれも悪酒なり。暮六ッ時分、府中明神前の松本屋に泊る。酒はなはだ不味し。

廿三日に江戸に帰る。

以上のように、広重の甲府行は、芝居看板や幕・幟・襖・屏風などを描くことと、道中の山水の奇勝を観ることであった。甲斐の国というのは東は武蔵・相模国、南は駿河国、西北は信濃国に接し、四方に山峰が連なり、郡郷はその間にあるため、山水奇絶の所が多い。景色絵師広重にとっては最良のお手本であった。

ところで、ご覧のように広重は、芝居や狂歌とともに食べ歩きが好きだったようであるが、江戸ソバリエとして気になるのが蕎麦である。

(4月)十二日。夜、蕎麦ご馳走になる。

十六日。村田幸兵衛より手打蕎麦を貰う、極上々なり。

十九日。夕方、辻屋にて酒と蕎麦ご馳走になる。



〔天目山栖雲寺〕

(11月)十三日。夜、辻屋に招かれる、肴はよし、酒・蕎麦不味かった、早々に帰る。

広重は甲府で蕎麦を4回食べている。蕎麦史に詳しい人なら、江戸時代は「甲州蕎麦発祥説」(甲州市天目山栖雲寺)があったことはご存知であろうから、甲府で蕎麦を振舞われたことは納得できるところである。ただ『日記』は半年間飛んでいるから、実際はもっと食べていたのであろう。



〔甲州天目山より富士を望む〕
(ほしひかる 絵)

この中で広重は「手打蕎麦」と記録している。現代は「機械打ち」に対して「手打ち」というが、当時は自ら(手ずから)打った蕎麦、あるいは生粉打ちや上等な蕎麦を「手打ち蕎麦」といった。だから街道の`茶店蕎麦、でも、江戸の`蕎麦屋の蕎麦、でもなく、関係者が自ら打ったいわゆる`家庭蕎麦、というわけである

また面白いことに同じ`家庭蕎麦、でも「村田幸兵衛から貰った手打蕎麦は、極上々」、「辻屋に招かれたときの、酒・蕎麦は不味かった」と評している。

そういう視点に立つと、街道茶屋の食事がまずかったことは記録しているが、おいしかったとは言っていない。だとすれば、先述の『東海道』や『木曾街道』の`茶店蕎麦、の味も推して知るべしということになるのだろう。

すなわち、`茶店蕎麦、より`家庭の手打ち蕎麦、が美味い。とはいっても`家庭蕎麦、にも美味い、不味いはもちろんある。これが広重の舌で感じた蕎麦である。

ただし、広重の舌の美味しさの基準は何だろう。そう考えるとき広重の『旅日記』に参考になる記録がある。

一つは、先の『甲州日記』(1841年)である。

四月三日に、こうある。

八王子千人町より、散田村(八王子)というあたり…、小なじといふ宿、右側に山口といふ茶屋あり、いたってきれい。江戸料理番を使って、なんでもできると言う。

二つは、『上総鹿野山日記』(1844年)である。

それにはこうある。

三月廿七日。四ツ時頃より鹿野山(君津市)参詣。

廿八日。白鳥大明神(君津市白鳥神社)祭礼にて、商人参詣群集す。帰り道南子安村(君津市)、釣鐘淵池(鐘ヶ淵)中不思議なり、木更津二組屋にて昼食、この家少々江戸風の料理屋なり、夕七つ時頃、久津間村に帰る。

二つの『日記』からうかがえるのは、江戸っ子広重が「おっ、こんな所に江戸料理店がある」と嬉しがっている姿である。つまり江戸っ子広重の舌の基準は`江戸の味、だったのである。

そういうわけで、「村田幸兵衛の手打蕎麦、極上々なり」と広重が感動している顔が浮かんでくるというものではないか。

(後編へ続く)